

淨土教の正機

横超慧日

すべて教というものは、教を説く者が教を受ける者の素質能力を適確に観察し把握して、それに正しく適應した教を説くのでなければ、教を效果あらしめることはできない。その場合の教を受ける者の素質能力を機という。機は發動の由る所であり、教が説かれた時、直ちにそれに應じて内面に潜んでいた力が表面に發動するて、がかりとなるものである。宗教上の偉大な教師である佛陀は、衆生の機の差別を精密に知悉しておられた。如來の十力の一である根上下智力というのがそれである。そこで衆生の機の千差萬別なるに應じて、佛陀の教法も一様であることができず、おのずから八萬四千の法門とならざるを得なかつたが、その多くの法門の中にはその間に何等かの組織體系があつたであらうか。この點に關して、機に應じて説かれた教法は連續的進展の形に於て系列づけられて見ると見るのが、法華經に基づく天台宗の五時教判や解深密經に基づく法相宗の三時教判である。これらの説によれば、天台宗や法相宗の教は、最上の機根のために説かれた最勝の法ということになる。然しそれは同時に、最勝の法ではあるとしても、機根調熟の過程を経ず直ちに佛道へ入つた愚鈍の凡夫には、とりつくしまの

ない無縁の法と言わねばならぬ。これが天台宗等の説を以て聖道門の教と言われる所以であらう。

これに對して凡夫の往生成佛を説く淨土門の教がある。然し淨土往生を説く經典にも種々の異説があつて、觀經の如く定數二善を求める經もあれば、阿彌陀經の如く自力稱名を勸める經もあり、又大經の如く至心信樂を教える經もある。これら三經の異説について、何れを眞實とし何れを方便とすべきか。一往は易行の他力念佛を初歩的入門の教とし、次で自力稱名へ進み、最後に自力修行の法に入らしめられるのだという解釋も可能であらう。この見方は聖道門の立場の人々には、最も理解し易い説となる。然し教の權實を決定するに當り、その基準となるものは佛の出世本懷でなければならぬ。即ち佛陀の出現目的を確實に達成し得る教法が眞實であり、然らざるものは方便の教法と言わねばならぬ。この觀點に立つて、如來所以出興於世光闡道教欲拯群萌惠以眞實之利と説かれる大經より判斷する時、易行の念佛往生を説く大經の説こそ眞實の教でなければならぬ。自力修善の難行を衆生に期するということは、如來の大慈悲心と大威神力とを局限するものである。されば觀經や阿彌陀經こそ方便假門の説と言われることになるが、それらの説は如何にして方便の用をなすか。思うに、易行の法は易信の法でなく、寧ろ極難信の法である。衆生は自らの機根を顧みず、難行の自力修善や自力稱名に心を寄せる。これによつて、自力修善の觀經によつて先ず淨土の求むべきを教え、自力稱名の阿彌陀經によつて念佛こそ大行であることを教えられた。直ちに弘願の念佛を信する者には、方便の教を経由する必要がないけ

れども、そのできぬ者を誘引するには觀經と阿彌陀經との教が包容攝取の用をなす。これ又佛の大悲心の發露といふべきであろう。祖師の開顯せられた三經隱顯の釋義に信順して、些か自信の領解を述べた。諸賢の叱正を俟つ。

太子示現の文について

佐々木蓮塵

宗祖が叡山を出て六角堂に參籠し、后世を祈らせられたところ、九十五日の曉、聖徳太子示現の文によつて吉水の法然上人の許に行かれたことは惠信尼文書によつて明らかになつた。ところが、その文書に添えられていた筈の太子示現の文が紛失されているので、從來の學者は多く廟窟の偈を以てそれに當てていたようであるが、最近、宗祖自筆の夢記——行者宿報設女犯の四句の偈文が発見されたことによつて、それを太子示現の文に當てようとする新しい見方が生まれて來たのである。しかし、それは當を得たものでないと思う。何んとなれば行者宿報設女犯の四句偈は、宗教生活と性生活との調和を暗示し、宗教的に結婚を肯定する意味以外にない。ところが惠信尼文書によると、宗祖が六角堂に參籠された意圖は専ら「后世助かる道」「生死出づべき道」を明らかにする以外になかつたことは文面分明である。即ち人間の有限性に目醒めて専ら永遠の生命を願求されたものであつて、そこには性の悩みに關する言葉は全く出て居ない。若し惠信尼文書に對應するような示現の文を他の

聖教中から拾うならば、最須敬重繪詞(一)に「いかにしてか、このたびまめやかに生死をまぬがるる道を得んと思ひ給ひければ(中略)日本傳燈上宮王の濟度を仰いて(中略)六角堂へ百日の參籠をいたしましたまひて、願くは有縁の要法を示し、眞の知識にあふことを得しめたまへと、丹誠を抽て祈り給ふに、九日(九)に満する夜の夢に、未代(未)出離の要路念佛にはしかず。法然上人今苦海を渡す、彼の所に到つて要津を問ふべき由、慥かに示現あり。即ち感涙をのこい靈告に任せて吉水の禪室にのぞみ事の子細を啓し給ひければ、發心の強盛なることも有がたく、聖應の揭駕なることも他に異なりとて、聖道淨土難易の差別手を取てさづけ、安心起行肝要の奥旨舌を吐て述給けるに、日頃の蓄懐ここに満足し、今度の往生忽ちに決定しぬと悦たまふ。

干レ時建仁元年辛酉聖人二十九歳、聖道を捨て淨土に歸し、雜行を擱て念佛を専らしし給ける始なり」とある記録が最も眞實に近いものと思う。その理由としては、參籠のネライが「后世助かる道——生死出づべき道」である點、同く惠信尼文書と一致し、「日本傳燈上宮王の濟度を仰いて」とあることが太子の示現に對應するものであり、「聖道淨土難易の差別手を取てさづけ、安心起行肝要の奥旨舌を吐いて述給けるに、日頃の蓄懐ここに満足し、今度の往生忽ちに決定しぬと悦たまふ。干レ時建仁元年辛酉聖人二十九歳、聖道を捨て淨土に歸し、雜行を擱て念佛を専らしし給ける始なり」の文は教行信證后序の「建仁元年辛酉捨雜行歸本願」の文、并に傳繪の「眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきわめて、これをのべ給ふに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫